小規模校における新学習指導要領に基づくバドミントン単元の授業開発

三　浦　　裕[*1]　　二　谷　優　吾[*2]　　菅　原　　彰[*3]
（北海道教育大学教育学部旭川校）　（旭川市立東明中学校）　（旭川市立嵐山小中学校）

The Class Development of Badminton Unit Based on The New Course of Study (Health and Physical Education) in A Small-Scale Elementary and Junior High School

Miura Yutaka[*1]　Nitani Yugo[*2]　Sugawara Akira[*3]

（＊1　Hokkaido University of Education，Asahikawa）
（＊2　Tomei Junior High Scool，Asahikawa）
（＊3　Arashiyama Elementary and Junior High School，Asahikawa）

概　要

2021年度より，新中学校学習指導要領が完全実施される。このため，本研究においては小規模校におけるよりよい体育授業づくりを目的として，その特色を生かしたバドミントン単元の授業開発を行うものである。新学習指導要領においては「①知識及び技能」,「②思考力・判断力・表現力等」,「③学びに向かう力・人間性等」という３つの力が求められている。結果として，これらの力を育成する学習指導計画案の作成と授業実践を実施することができた。その授業づくりのポイントは，少人数であるという特色を生かした「①知識及び技能」の丁寧な指導，またバドミントンを題材としたペアやチームによる「②思考力・判断力・表現力等」の育成，そして合同体育による「③学びに向かう力・人間性等」の育成であった。小規模校は少人数であるため，学習指導の成否が見えやすく，評価も還元しやすい。今後は，新しく求められるこれら３つの力の育成を念頭に置いた体育授業づくりが重要である。

Abstract

The new Junior High School Course of Study (Health and Physical Education) will be fully implemented from 2021. For this reason, this study is aimed at developing badminton classes/unit that take advantage of their characteristics in order to create better physical education classes at small-scale schools. The new Course of Study requires three abilities: (i) Knowledge and Skills, (ii) Thinking, Judgment and Expression Skills, and (iii) Ability to Learn and Human Nature. As a result, in this study, the class development of the badminton unit utilizing the characteristics was carried out for the purpose of better physical education class making in the small-scale school. The key point of the class creation is the polite instruction of “(i) Knowledge and Skills”, because they are small in number, and the development of “(ii) Thinking, Judgment and Expression Skills”by pairs and teams based on badminton, in addition it was the cultivation of “(iii) Ability to Learn and Human Nature”through joint physical education by all grades. Because small-scale schools are small, the effectof the learnig instruction is easier to understand, and the evaluation is easier to be reduced. In the future, it will be important to create physical education classes with these new three required skills in mind.

はじめに

児童生徒に関わる一定の人数基準を満たさない場合に認定される小規模校は，その環境や特色が様々であり，それぞれに特徴を有している。小規模校とは，学校教育法施行規則第41条を参考にして，一般的に「11学級以下の小中学校のことを指す」とされている[5)]。つまり，小学校ではどの学年も平均２学級以上，中学校では同様に４学級以上でなければ，この小規模校に当てはまる。

憲法第26条に定められているように，「すべて国民は，法律の定めるところにより，その能力に応じて，ひとしく教育を受ける権利を有する」とあるものの，日本全国どの小・中学校においても「平等の教育を受ける」などとは示されてはいない。同様に，教育基本法や学校教育法（施行規則）においても「男女の平等」という言葉は記述されてはいるが，「平等の教育」という内容は示されてはいない。したがって，各学校の実態を反映した学校教育方針により，それぞれが特色ある教育を実施しているものと推察される。

では，どのような教育が特色ある教育と言えるのであろうか。反語的に言えば，小規模校だからこそ可能な実りある授業とは，いったいどのような授業であろうか。

これについて考える際，学習指導要領の改訂を見通さなければならない。なぜなら，小規模校であれ，学校教育法施行規則上に定められる学校である以上，日本では一般的に学習指導要領の法的拘束力を受けることになるからである。つまり，新学習指導要領に基づき，小規模校としての利点が優位となる単元種目の開発が求められることになる。

なお，今回本稿で取り上げるバドミントン単元の授業開発に関する研究は，中学校新「学習指導要領および同解説（「保健体育編」[2),3)]，以下，「要領」および「解説」と略す」）は周知されてはいるものの，2021年が完全実施年となることもあり，現在のところまだ皆無の状況である。

１．研究目的

小規模校におけるよりよい体育授業づくりを目的として，新「中学校学習指導要領」に基づいたバドミントン単元の授業開発を行うため，作成した単元計画に基づく授業実践と指導者側からの評価を行う。

２．研究手順及び方法

１）研究手順・方法

このバドミントン単元の授業を実施するため，前出の新「解説」に基づき第一次学習指導計画案（以下，事前指導案）を考案・作成し検討を行った。次に，表出した課題について検討を行い，第二次学習指導計画案（以下，実践指導案と略）を考案・作成した。この実践指導案を研究協力校である旭川市立嵐山小中学校のＳ校長に評価していただき（外部評価），改善を行った。改善後の実践指導案に基づき，６時間単元のバドミントン授業を実施した。実践授業の成果と課題については，Ｓ校長に５時間分の授業を参観していただくことができたため，授業後評価コメントをいただいた。最終的には，このコメントを基に検討を行い，さらに改善された第三次学習指導計画案（以下，モデル指導案と略）を考案・作成した。

なお，後述するが，事前指導案と実践指導案はほぼ同様であることから事前指導案については，紙幅の関係上，割愛する。

２）研究対象

本研究において対象とされた授業は，嵐山中学校により配当されたバドミントン単元の１～３学年の合同授業（６単位時間）であった。対象の生徒は１年生男子１名，２年生男子２名，女子２名，３年生男子１名，合計６名であった。授業の実践期間は2019年８月27日から同10月１日までの合計６時間であり，詳細な日程は下記表１の通りであった。

表１　授業実施日と出席数

	月／日	生徒数
第１回	8/27	6
第２回	8/29	5
第３回	9/2	5
第４回	9/3	4
第５回	9/5	4
第６回	10/1	4

３．事前指導案の構想

１）新「学習指導要領」について

現行の「要領」から新「要領」への改訂の経緯として，「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが，成人して社会で活躍する頃には，我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少，グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により，社会構造や雇用環境は大きく，また急速に変化しており，予測が困難な時代となっている。[4)]」という背景や予測が示されている。その主な

改訂の要点として，「①育成を目指す資質・能力の明確化」，「②主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善）の推進，「③各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進」が挙げられている。これらは，具体的に次のような内容となっている。

①「育成を目指す資質・能力の明確化」について

同上書[4]では，これまで示されていた「生きる力」をより具体化するため，教育活動全体を通して育成を目指す資質・能力が，ア「何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」，イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」，ウ「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱に再整理された。

②「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

また，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のため，留意すべき以下の６点が示されている。具体的には，

ア　義務教育段階はこれまで地道に取り組まれ蓄積されてきた実践を否定し，全く異なる指導方法を導入しなければならないととらえる必要はない

イ　授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく，児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」，「対話的な学び」，「深い学び」の視点で，授業改善を進める

ウ　各教科において通常行われている学習活動の質を向上させることを主眼とする

エ　１回１回の授業で全ての学びが実現されるものではなく，単元や題材など内容や時間のまとまりの中で，学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか，グループなどで対話する場面をどこに設定するか，児童生徒が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てているかを考え，実現を図っていく

オ　深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は，「どのような視点で物事を捉え，どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり，教科等の学習と社会をつなぐものであることから，児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ，教師の専門性が発揮されることが求められる

カ　基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には，その確実な習得を図ることを重視する

③「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進」について

さらに，「各学校においては，教科等の目標や内容を見通し，特に学習の基盤となる資質・能力（言語能力，情報活用能力，問題発見・解決能力等）や現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力（情報モラルを含む。以下同じ。）の育成のためには，教科等横断的な学習を充実することや，「主体的・対話的で 深い学び」の実現に向けた授業改善を，単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して行うこと」が示されている。

これらの実現のため，「生徒や学校，地域の実態を適切に把握し，教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと，教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと，教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して，教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと（カリキュラム・マネジメント）」が新たに示された。

２）体育分野の考え方

以上の「要領」改訂の基本的な考え方から，保健体育においてはこれまでの授業づくりに関する考え方が整理される。

その１つ目は，現行の「要領」では４つのうちの１つの単独の観点である「技能」が，新「要領」では「①知識及び技能」という「知識」と組み合わされた観点になるということである。そして，この力は「生きて働く（使える）力」として育成されなければならない。したがって，例えばバスケットボールでのショートという技術の練習は，使える力としてゲームで発揮されるように指導しなければならないし，また評価も練習して使える力が身についたかどうかゲームで見定めなければならないであろう。

２つ目は，「②思考力・判断力・表現力等」の観点である。これは，「理解していること・できることを，どのように使うのか」に関連する内容である。これまでのような「基本技術→発展技術→応用技術」といった一般化された技術練習を何度も積み重ねるパターン化した指導というよりも，ゲームを前提として想定する中で，さまざまに変化するゲーム場面（いわゆる未知の状況）にも対応できる技能の育成が求められているということである。単独の技能の完成を個々に積み上げる指導を繰り返すというよりは，身につけた基礎的な技能をもって変化するゲーム場面で「どのように使うのか」という「思考力・判断力」の育成である。このためには，スポーツに関わる「見方・考え方」を働かせることが重要になる。具体的には，各自の学習を見通し振り返る場面や教師やグループ・ペアなどで対話する場面などを確保・設定し，身体を動けるだけ動かすような授業ではなく，考えて取り組む授業にしていかなければならない。生徒はゲームの勝敗の結果を気にするが，その結果も含め

た練習過程全体が学習であることに留意しなければならない。

３つ目は，「③学びに向かう力・人間性等」である。これは，よりよい人生を送るために，生徒が生きていく中でどのように学校や他者，あるいは社会の出来事に関わっていくのかに関わる態度の内容である。技能が身についていても，また自分一人だけでよく考えていても，取り組む練習に積極的・意欲的でなければ，学習を形成する態度としては不十分である。学習に取り組むという学びを，その場においてもまたその後も生かそうとする学びに「向かう力（人間性等）」の育成が重要である。

４つ目は，上記①～③の関係性についてである。現行の「要領」および「解説」が発刊された頃は，観点別学習として「関心・意欲・態度」,「思考・判断・表現」,「技能」,「知識・理解」の４つの観点が個別に焦点化され，授業づくりや評価が行われていた。例えば，保健体育では，１時間の授業や単元後半に連続するゲームの授業の目標が「技能」の１つだけであったり，当然対応する評価も同様の場合もあった。「何度練習させてもシュートがうまくならない，個別に丁寧に指導しても変わらない」など，「技能」という１つだけの観点に焦点化しすぎてしまう場合もあった。勿論，この指導法が全く意味のない指導という訳ではないが，その後，これらを組み合わせた授業構想が広がってきた。

それは，これら４つの観点を有機的に結びつける考えである。例えば，新「解説」において想定されているように，仲間のうまいプレイや技術資料を見るなどしてグループで話し合うことなどである。目標の設定内容により授業内容は異なるが，資料を見ることにより「知識・理解」と「技能」を関連付けた学習として，あるいはグループで話し合うことにより「思考・判断・表現」と「技能」を関連付けた学習として展開することができる。このように，単独の観点からだけではなく，また目標を１つに制限するのではなく，最終的に生徒にどのような力を身につけてほしいのかといった教育的視点からの授業づくりの考え方が当初より必要である。

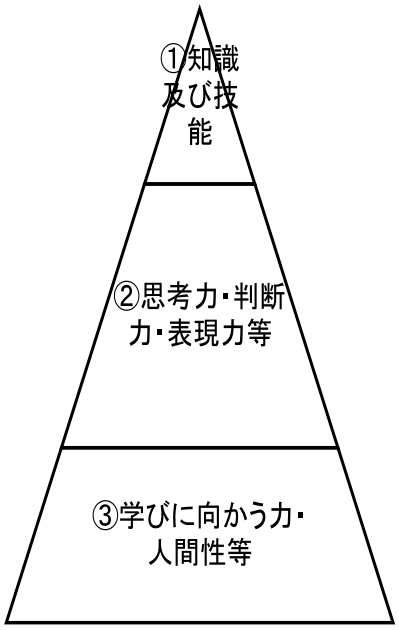
このことは，新「要領」に改訂されても同様である。「①知識及び技能」,「②思考力・判断力・表現力等」,「③学びに向かう力・人間性等」はそれぞれ単独に設定することもできると考えられるが，前記新「要領」の趣旨を踏まえるならば，新の方が現行よりもさらに綿密にまた有機的に機能することが求められる。

これは「１人１台端末環境は，もはや令和の時代における学校の「スタンダード」であり，特別なことではありません。」と，GIGAスクール構想を謳う文部科学省の施策の保健体育版になるのかもしれない[6)]。

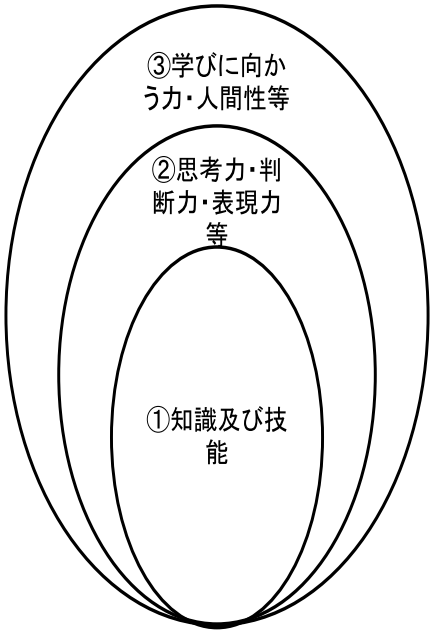
３）新「解説」における学力の考え方

これまでの考え方のイメージを端的に図で表現すると，下記図Ａ～Ｃのようになる。学力を観点別に，そして個別

図Ａ



図Ｂ



図Ｃ

に設定するとすれば，図Ａとなる。また，それらに積み上げの関連性をもたせると図Ｂ，あるいは核となる観点をもたせると図Ｃの関係図となることも考えられる。新「学習指導要領」に基づく授業も，このような考え方でよいのであろうか。このことについては，「10モデル指導案のまとめ」において，再度検討を行う。

４）球技領域について

本稿において対象とするバドミントンは，球技領域の「ネット型」に分類されている。バドミントンはさまざまな教育的価値を有する種目であり，現行および新「要領」と「解説」においても取り上げられている。バドミントンはコート上でネットを挟んで相対し，身体やラケットを操作してシャトルを空いている場所に返球し，一定の得点に早く到達することを競い合うゲームである。また，バドミントンは運動強度の高い運動であり，ごく短い休息を挟みながらも，プレイ中はコート内を激しく動き回る種目であることから，持久性や瞬発性の体力を育むことが期待される。したがって，これらの特性を持つバドミントンは，発育発達期にある中学生の授業において取り扱う種目として適したものであると言える。

なお，後述する実践授業には３年生も含まれているが，これまでバドミントンの授業を実施していなかったことから，授業における「知識及び技能」の目標は，「解説」に示されている下記１～２年の目標に準拠している。

（１）「知識及び技能」

ボールや用具の操作と定位置に戻るなどの動きによって空いた場所をめぐる攻防をすること

（２）「思考力・判断力・表現力等」

攻防などの自己の課題を発見し，合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己や仲間の考えたことを他者に伝えること

（３）「学びに向かう力，人間性等」

球技に積極的に取り組むとともに，フェアなプレイを守ろうとすること，作戦などについての話し合いに参加しようとすること，一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすること，仲間の学習を援助しようとすることなどや，健康・安全に気を配ること

これらの内容は，本研究において取り組む学習指導計画の構想や作成，及び授業実践の基盤となるものである。

５）研究協力校の実態

研究協力校は，自然に恵まれた農業・酪農地域の小規模校であり，「稲作体験学習」や「水生生物観察」などの様々な自然体験活動が充実している学校である。また，地域との連携も密であり，「陶芸教室」をはじめとする地域連携，外部講師の活用にも力を入れている学校でもある。さらに，「放課後クラブ」という取り組みにおいては，様々なスポーツ活動を通して子どもの体力向上を目指している。

研究協力校では，「併置・小規模・少人数の利点を活かす10の方策[1)]」を打ち出している。その具体的な内容として，「①地域に根ざした教育活動」，「②教職員全員が学級担任」，「③少人数学級で確かな学力を追求する」，「④質を求めた問題解決的な学習の追求」，「⑤体験活動の充実」，「⑥言語活動の充実」，「⑦習得・活用・探求と複式学級の学び方の工夫」，「⑧小規模校における社会性の育成」，「⑨全校でのリーダー性とフォロワー性の育成」，「⑩児童生徒個々の理解と変容・願いの共有」が示されている。これらの教育的理念に基づき，小規模校ならではのきめ細かい教育活動がなされている。

６）取り組みの基本的な考え

以上の新「要領」および新「解説」の改訂の要点と，研究協力校の実態をふまえた上で，６時間単元のバドミントンの授業実践を行う。特に，新「要領」の内容における目標・評価の三観点を授業の中でどのように組み込み，見取るのかという点が重要である。また，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて，学習を見通し振り返る場面や，仲間と対話しながら活動する場面を確保し，授業を充実させられるような指導を行っていく必要がある。小規模校であるという実態のよさを活かし，より一人一人に合わせた授業を考案していくとともに，授業内容の充実を図っていく。

４．事前指導案の作成と評価

研究協力校の実態を踏まえた上で，新「解説」に則ったバドミントン単元の事前指導案を以下に示したいが，目標・学習内容及び評価についてのＳ校長の評価コメントは，事前指導案の１／６時間目の目標「用具や技術の名称を知り，基本的な技能を身に付ける」を「用具や技術の名称を知り，基本的となる用具の使い方を身に付ける」に修正することの１点のみであった。

このため，事前指導案と実践指導案はほぼ同様であることから，ここでは紙幅の関係上事前指導案を省略し，実践指導案を掲載することとし，授業実践を行った（表２）。また，Ｓ校長の全時間の評価コメントについては新「学習指導要領解説」に照らし合わせ確認を行い（表３），これらすべてに対応した後，実践指導案を修正し，実践指導案の構想・作成を行った。この指導者側からの評価を踏まえ，改善した学習指導計画がモデル指導案であるが，これも上述と同様に目標・学習内容及び評価についてのコメントはなかったため，省略する。

したがって，実践指導案が最終的な学習指導計画となった。

表２　実践指導案

時数	目　　標	学習内容	評　　価
1	●用具や技術の名称を知り，基本的となる用具の使い方を身に付ける	ラケットをもってランニング 素振り	①知識及び技能
	○自己の課題を発見し，有効な解決方法を考える	シャトルリフティング	②思考力・判断力・表現力等
	◎安全に配慮し，仲間と協力して積極的に取り組むとともに，単元全体の見通しを持つ	道具に慣れるためのゲーム 学習カードへの記入	③学びに向かう力・人間性等
2	●用具の操作に慣れ，身体や用具を操作する技能を身に付ける	テールヒット サービス練習	①知識及び技能
	◎自己の課題を発見し，有効な解決方法を考える	ペアごとに設定した回数のラリー	②思考力・判断力・表現力等
	○安全に配慮し，仲間と協力して積極的に取り組む	学習カードへの記入	③学びに向かう力・人間性等
3	◎ルールを理解し，ラリーを行うための基本的な技能を身につける	ラリー練習①（教師→生徒）	①知識及び技能
	●自己の課題の合理的な解決に向けて，運動の取り組み方を工夫する	ラリー練習②（生徒同士）	②思考力・判断力・表現力等
	○安全に配慮し，学習や話し合いなどに積極的に参加する	話し合い　学習カードへの記入	③学びに向かう力・人間性等
4	◎ルールを理解し，ラリーを継続して行う技能を身につける	個人練習（現状把握）	①知識及び技能
	●自己の課題の合理的な解決に向けて，運動の取り組み方を工夫する	振り返り　ペア練習（選択した練習）	②思考力・判断力・表現力等
	○安全に配慮し，話し合いや仲間の学習の援助などに積極的に参加する	話し合い　学習カードへの記入	③学びに向かう力・人間性等
5	◎空いた場所を作り出して，攻撃する	個人戦（ミニゲーム）	①知識及び技能
	●課題を発見し，その解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己の考えたことや感じたことを他者に伝える	自己や仲間の課題に対応した選択練習	②思考力・判断力・表現力等
	○フェアなプレイを守り，仲間のプレイを認めようとする	審判・記録　学習カードへの記入	③学びに向かう力・人間性等
6	○相手の空いた場所をめぐる攻防を展開する	団体戦	①知識及び技能
	●課題を発見し，その解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己の考えたことや感じたことを他者に伝える	作戦会議への参加　自己やペアの成果と課題を見付け伝える	②思考力・判断力・表現力等
	◎フェアなプレイを守り，互いに助け合いながら仲間を認めようとする	審判・記録　学習カードへの記入	③学びに向かう力・人間性等

●最もウエイトの大きい評価　◎次にウエイトの大きい評価　○通常のウエイトの評価

表３　実践指導案についての評価コメント

時間	評　価　コ　メ　ン　ト	新学習指導要領との対応
1／6	1　課題の提示方法は，どうするのか。	③学びに向かう力・人間性等
	2　WSに記入させるタイミングは，どうするか。	②思考力・判断力・表現力等
	3　３種類の「道具になれるためのゲーム」の順番は，適切であるか。	③学びに向かう力・人間性等
	4　「ペア打ち」において，教師やバドミントン部の生徒を固定した位置に入れて，ローテーションしていくのはどうか。	①知識及び技能
2／6	1　教師もしくはバドミントン部の生徒で，サービスやストロークの見本を見せるのはどうか。	①知識及び技能
	2　WSに個人の課題を書かせた方が，よいのではないか。	②思考力・判断力・表現力等
	3　「テールヒット」の解説を入れた方が，よいのではないか（ポイントを示す）。	①知識及び技能
	4　「テールヒット」を行う際三人一組で行う方が，よいのではないか。	③学びに向かう力・人間性等
	5　「サービス」の種類を，明確に記すこと（ポイントを示す）。	①知識及び技能
	6　「サービス練習」においても，三人一組で行う方がよいのではないか。	③学びに向かう力・人間性等
3／6	1　「バドピンポン」の説明を，入れる。	①知識及び技能
	2　本時の目標に照らし合わせると，「ミスが少なかったチーム」よりも「返せたらポイントゲット」の方が適切ではないか。	②思考力・判断力・表現力等 ③学びに向かう力・人間性等
4／6	1　「３点（ミス）交代の簡易ゲーム」ではなく，「何回ラリーを続けられるか」の簡易ゲームの方が，目標の「ラリー継続」にふさわしいのではないか。	②思考力・判断力・表現力等 ③学びに向かう力・人間性等
	2　それぞれの活動で，観察のポイントを明確にすること。	②思考力・判断力・表現力等
	3　「アドバイス」を，練習に取り入れる。	②思考力・判断力・表現力等
5／6	1　「ラリーを継続させること」から，「空いた場所を作り出して攻撃すること」に変化することに意識させる必要がある。	②思考力・判断力・表現力等
	2　アドバイスを行う観点を，明確にする。	②思考力・判断力・表現力等
	3　サービスの簡易ルールの説明を加える。	①知識及び技能
6／6	1　勝ち負けだけではなく，「より点数を取る」という考え方をさせる工夫をする。	③学びに向かう力・人間性等
	2　試合順は，強い順番を決めさせる方がよいのではないか。	③学びに向かう力・人間性等
	3　審判をさせずに，セルフジャッチにする。	③学びに向かう力・人間性等

５　モデル指導案の構想（授業実践後の改善指導案）

実践指導案についていただいた評価コメントは，各時間の具体的な指導上の留意点に関するものであった。具体例として，１／６時間目の「１課題の提示方法は，どうするのか」は，単元最初の時間として単元全体の目標や見通しに関わる内容であり，また同時に１時間の授業の開始時としてこの時間の課題把握の場面でもある（註１）。いずれの内容も，新「学習指導要領解説」の内容（①知識及び技能，②思考力・判断力・表現力等，③学びに向かう力・人間性等）と関わり合うことから，この結果を基に，さらに改善された授業実践指導案となるモデル指導案の構想および作成を行った。

モデル指導案は，事前指導案と同様に６時間単元である。事前指導案全体の検討を踏まえ，目標や指導などについて変更・修正した部分もあるが，基本的に新「学習指導要領解説」に基づいていることに変わりはない。

６　モデル指導案の評価

ここでは実践指導案と同様に，紙幅の関係上，評価コメントのみ取り上げる。なお，１／６と３／６のコメントはなかった。

表４　実践授業についての評価コメント

時間	評　価　コ　メ　ン　ト	新学習指導要領との対応
2/6	1 「テールヒット」の代替名称を考えてみてはどうか。	①知識及び技能
	2　テールヒットにおいて，コルク部分を打たせるためのアドバイスを工夫すること。	②思考力・判断力・表現力等
4/6	1　ラリー練習①において，生徒間でアドバイスをし合うのは少し難しいのではないか。	②思考力・判断力・表現力等
5/6	1 「準備するもの」の欄に，大型ディスプレイを加えること。	①知識及び技能
	2　指導案上に，自己の課題を記入するための時間を明記すること。	②思考力・判断力・表現力等
	3　個人戦の対戦表をあらかじめ臨機応変に対応できるような物を作成するべきであること。	③学びに向かう力・人間性等
	4　対戦表への結果の記入は，審判を担当した生徒に行わせること。	②思考力・判断力・表現力等 ③学びに向かう力・人間性等
6/6	1　各試合後に，選手のみならず観察側のコメントを組み込むこと。	②思考力・判断力・表現力等 ③学びに向かう力・人間性等

7　モデル指導案の作成

表４の評価コメントを受け，事前指導案および実践指導案と同様に，新「学習指導要領解説」に照らし合わせ確認を行い，すべてに対応した後，モデル指導案の構想を行った。実践指導案により，実際の授業において生徒への指導ができたが，学習指導計画上は目標・学習内容・評価にコメントがなく修正もないことから，表４の結果を踏まえた実践指導案をモデル指導案とした。

なお，紙幅の関係上全６時間を記載できないため，表２でコメントの多かった第２と第５時間目の時案を事例として記載する。全時間の指導案の「１目標」にある●・◎・○の記号は，評価のウエイトを表しており，●が最もウエイトが大きく，次いで◎，そして○の順である。

1　本時の展開（2/6）　8月29日（木）　第５校時（13:25 - 14:15）

1）目標

●⑴用具の操作に慣れ，身体や用具を操作する技能を身に付ける（①知識及び技能）。

◎⑵自己の課題を発見し，有効な解決方法を考える（②思考力・判断力・表現力等）。

○⑶安全に配慮し，仲間と協力して積極的に取り組む（③学びに向かう力・人間性等）。

2）準備するもの

・ネット（２コート分），ラケット（10本），シャトル（２ダース），ワークシート（以下WSと略す，６枚），ホワイトボード（３台），課題を記入した模造紙（１枚）

3）本時の展開

	学習活動	教師の活動	留意点(・)評価(※)
課題把握(7分)	1 集合，整列，挨拶 ・健康状態の確認 2 準備運動 ・ストレッチ　・補強運動 3 課題の把握 ○3 種類の打ち方のデモンストレーションを見せる。 ・同時に，2 種類のサービスも見せる。 4 課題の記入	1 集合，整列，挨拶，健康状態・コートの確認 2 教師主導。手首や腕などは重点的に指導する。 3 前時の活動を振り返り，課題に向けた発問を行う。 *「前回の WS にうまくなりたいと書いてありましたが，バドミントンを行うために(ラリーを続けるために)重要な技能はどのようなことでしょうか?」 *「これから見せる 3 種類の打ち方の中で，重点を置いて取り組みたいものはどれでしょうか?」 4 課題の提示	・生徒にネットをあらかじめ立てさせておく。 ・状況に応じて，前時に記入した WS を確認させる。 ・あらかじめ準備した課題を書いた紙をホワイトボードに貼る。
	バドミントンを行うために必要な技能を，身に付けよう！		
解決の見通し(15分)	5 素振り ①オーバーヘッドストローク ②サイドアームストローク ③アンダーハンドストローク	5 資料をもとに，ストロークの種類を紹介する。 ・教師が示範する。 ・打点を意識させる指導を行う。 ○ストロークのポイント ①主にクリアーやスマッシュ，ドロップを打つときに使う。 ②主にドライブを打つときやレシーブをするときに使う。 ③主にロブやヘアピンを打つときに使う。	・それぞれのストロークのポイントを示した資料を準備しておく。 ※用具の操作に慣れ，身体や用具を操作する技能を身に付ける(●①知識及び技能)。
追及活動(20分)	6 テールヒット ・三人一組で行う。 ・ステージを利用。 予想される生徒のつまずき ・腕が曲がりすぎてしまう。 ・半身にならずに打ってしまう。 ○観察のポイント ・ラケットの持ち方，面の向きや打点 ・肘や膝のやわらかさ ・左手の位置　など 7 観察したポイントについて話し合う。	6 前時の課題をふまえ，打点や振り方の指導を行う。 ○指導のポイント ・ラケットの面の中心でとらえさせる。 ・5で行った素振りのフォームを意識させる。 ・テールを設定する位置を全体で共有する。 ・コルク部分を打たせる。 →音で判断させる。 7 グループごとに，観察したポイントについて順番に話し合わせる。	・テールをあらかじめ準備しておく。 ※自己の課題を発見し，有効な解決方法を考える(◎②思考力・判断力・表現力等)。 ・サービスのポイントを示した資料を

	8 サービス練習 ・三人一組で行い，アドバイスをし合いながら行う。 ・サービスの特徴を知る。 ・二種類のサービス 1)フォアハンドサービス 2)バックハンドサービス を試してみる。↓ ・自分に合ったサービスを選択する。 ○観察のポイント ・ラケットの持ち方，面の向き ・肘や膝のやわらかさ　など 9 観察したポイントについて話し合う。	8 サービスの種類を説明する。 ・教師が示範する。 ・サービスのしかたを説明する。 1)フォアハンドサービス 右足から左足へ体重を移動する。 シャトルを挙げて体幹を回転 2)バックハンドサービス 右足前方手首を固定し，肘の屈曲で打つ ・サービスのルールを確認する。 ・観察するポイントを明確に示す。 9 グループごとに，観察したポイントについて話し合わせる。	用意しておく。 ※用具の操作に慣れ，身体や用具を操作する技能を身に付ける(●①知識及び技能)。 ※安全に配慮し，仲間と協力して積極的に取り組む(○③学びに向かう力・人間性等)。
定着・発展(8分)	10 集合，整列 ・健康状態の確認　・整理運動 11 本時の振り返り ・成果と課題の発表 予想される生徒の回答 ・打つポイントが分かった。 ・打点が定まらなかった　など 12 まとめ(WS に記入) 13 次時の見通し 14 挨拶	10 WS を配付する。 11 本時の振り返りとまとめ *「ストロークやサービスはうまくできましたか?」数名に発表させ，全体で共有する。 ・次時の課題を見据えたまとめの発問を行う。 *「今よりもラリーの回数を増やしていくためには，どのようなことが必要でしょうか?」 12 WS に記入の指示 13 次時の予告を行い，見通しをもたせる。 *「次回はラリーをさらに継続させるために，ラケットにシャトルを正しく当てる練習をしましょう。」 14 挨拶	・ネットを片付けさせる。

4）評価

●(1)用具の操作に慣れ，身体や用具を操作する技能を身に付けたか（①知識及び技能)。
◎(2)自己の課題を発見し，有効な解決方法を考えたか（②思考力・判断力・表現力等)。
○(3)安全に配慮し，仲間と協力して積極的に取り組んだか（③学びに向かう力・人間性等)。

5）ワークシート

資料欄（省略)。

1　本時の展開（5/6）　9月5日（木）　第2校時（09:45 - 10:35）

1）目標

◎(1)空いた場所をつくりだして攻撃する（①知識及び技能）。

●(2)課題を発見し，その解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己の考えたことや感じたことを他者に伝える（②思考力・判断力・表現力等）。

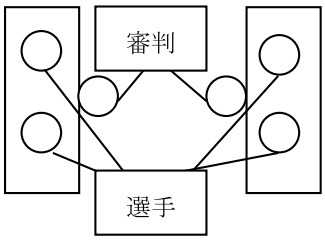
○(3)フェアなプレイを守り，仲間のプレイを認めようとする（③学びに向かう力・人間性等）。

2）準備するもの

・ネット（3コート分），ラケット（10本），シャトル（2ダース），ワークシート（WS：6枚），得点板（2台），ホワイトボード（1台），フラフープ（6個），課題を記入した模造紙（1枚），大型ディスプレイ（1台）

3）本時の展開

	学習活動	教師の活動	留意点(・)評価(※)
課題把握(10分)	1 集合，整列，挨拶 ・健康状態の確認 2 準備運動 ・ストレッチ　・補強運動 3 課題の把握 4 本時の課題	1 集合，整列，挨拶，健康状態・コートの確認 2 教師主導。手首や腕などは重点的に指導する。 3 前時の活動を振り返り，課題に向けた発問を行う。 ・玄関の銅像についてのイメージを聞く。 *「ラリーを継続する力を活かして，ゲームで自己のベストを尽くすために必要なことは何でしょう?」 *「ゲームに向けた自己の作戦を考えよう。」 →そのヒントを得るためにオリンピックの動画を見てみよう。 4 課題の提示 **自己の課題をもとに，ゲームに向けた作戦を立てよう！**	・あらかじめネットを立てさせておく。 ・前時に記入したWSを確認させる。 ・あらかじめ準備した課題を書いた模造紙をホワイトボードに貼る。
解決の見通し(5分)	5 オリンピックの動画を見る。 6 自己の課題の有効な解決方法（練習）を考える。 ・二人一組で話し合う。 ○予想される生徒の課題 ・ラリーを長く続けることができない(①，④) ・シャトルをコントロールすることが難しい(③) ・サーブを打つことが難しい(②)など	5「自己のパフォーマンスを発揮するために，参考にすべきところはどんなところか。」ということに目を向けさせる。 6 前時の学習をふまえて，自己にあった練習を選択させる。 ・選択することが難しい生徒には教師が助言する。 ○練習方法の選択肢 ①ラリー練習 ②サービス練習 ③コントロール練習 ④テールヒット	・あらかじめ動画(大型ディスプレイ)を準備しておく。 ・あらかじめ練習方法を例示する（前時の練習をふまえて選択させる）。 ※課題を発見し，その解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己の考えたことや感じたことを他者に伝える(●②思考力・判断力・表現力等)。 ・練習に使う的(フラフープ)を準備しておく。
追及活動(25分)	7 課題発見，練習 ・二人一組で選択した練習を行う。 ・個人練習　・ペア練習 8 個人戦(ミニゲーム) ・7点先取1ゲームで，シングルス	7 自己や仲間の課題を意識させて行わせる。 ・積極的にアドバイスを交わし合うよう促す。（打ち方，打つ場所，動き方など） →仲間の良い点や改善点を自己の取り組みに活かすよう指導する。 8 ゲームのルールを確認する。 ・点数(7点1ゲーム)	※フェアなプレイを守り，仲間のプレイを認めようとする(○③学びに向かう力・人間性等)。 ・対戦表をあらかじめ作っておき，ホワイトボードに貼る。

	のゲームを行う。 ・総当たりのリーグ戦で行う(2コートで行う)。 ・試合がない生徒が審判（得点係）を行う。  ・各試合後に，得点を対戦表に記入する。	・リーグ戦の結果を発表する。 ・次時の団体戦のチームを発表する。 Ａチーム(1 位，4 位，6 位) Ｂチーム(2 位，3 位，5 位)	※空いている場所をつくりだして攻撃する(◎①知識及び技能)。
	9 作戦を立てる。 ・3 人 1 チームで，自己や仲間の課題を話し合う。 ・話し合いが終わり次第，チーム練習	9 自己や仲間の課題を積極的に話し合うよう助言する。 ・仲間と協力して高め合うよう指導する。	※課題を発見し，その解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己の考えたことや感じたことを他者に伝える(●②思考力・判断力・表現力等)。
定着・発展(10 分)	10 集合，整列 ・健康状態の確認　・整理運動 11 本時の振り返り ・成果と課題の発表 予想される生徒の回答 できた ↓ ・これまでの成果を発揮する。 ・○○を意識して挑む。 ・全員で楽しむ。 12 まとめ(WS に記入) 13 次時の見通し 14 挨拶	10 WS を配付する。 11 数名に発表させ，全体で共有する。 *「ゲームに向けた作戦を具体的に立てることができましたか?」 ・次時の課題を見据えたまとめの発問を行う。 *「次回の団体戦に向けて，自分の最高のパフォーマンスが発揮できる方法を考えよう。」 12 WS に記入の指示を行う。 13 次時の予告を行い，見通しをもたせる。 *「団体戦に向けて，自己の良いところや練習するポイントなどを整理しておこう。」 14 挨拶	・ネットを片付けさせる。

4）評価

◎(1)空いた場所をつくりだして攻撃する（①知識及び技能)。

●(2)課題を発見し，その解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに，自己の考えたことや感じたことを他者に伝える（②思考力・判断力・表現力等)。

○(3)フェアなプレイを守り，仲間のプレイを認めようとする（③学びに向かう力・人間性等)。

5）ワークシート

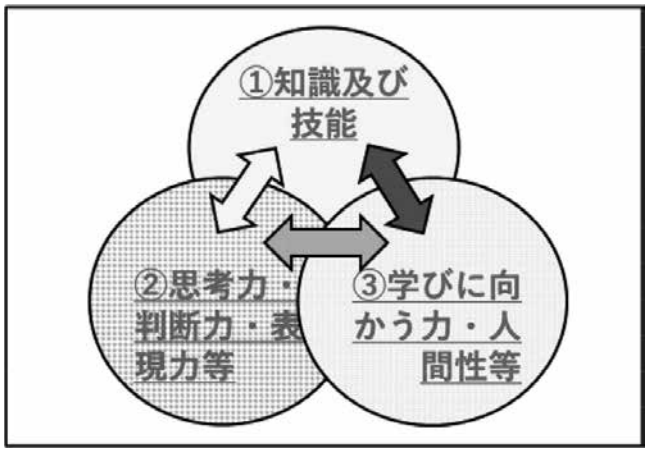
資料欄（省略)。

８　モデル指導案のまとめ

以上，実践指導案による実際の授業実践を終え，上記の最終的なモデル指導案を作成した。次年度以降，この単元を実施する場合に，このモデル指導案は貴重な参考資料となると考えられる。

しかし，この計画案の中で，検討しておかなければならないことがある。それは，「３事前指導案の構想」の「３）新「解説」における学力の考え方」で述べた新「学習指導要領解説」に基づく学力についての考え方である。この授業は体育分野の球技領域のバドミントン単元であったため，理解しやすいところもあったと思われるが，新「学習指導要領」において求められている力とは，「①知識及び技能」，「②思考力・判断力・表現力等」，「③学びに向かう力・人間性等」の３つの柱である。これまでのように１時間の目標を１つの観点にのみ限定したりするのではなく，各時間にこれら３つのウエイトは異なるものの（モデル指導案の各時間の目標に示したように），全ての時間にこの３つの目標を盛り込むことが望ましく適切であると考えられる。

その理由について，次の図Ｄと図Ｅを使って説明する。これら３つの力に関連性をもたせると，図Ｄのようなイメージとなる。これらは重複（共通）する要素もあり，互いに関連し合うというとらえ方である。当然このようなとらえ方は，現在少しずつではあるが理解され，導入されるようになってきているものと思われる。全体的・一般的なイメージとしては，理解されやすい。

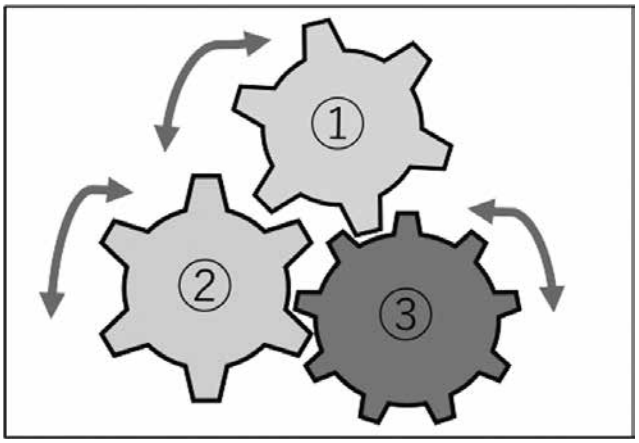


図Ｄ

しかし，どのような要素が，例えば「①知識及び技能」と「②思考力・判断力・表現力等」に共通するのかといった具体的な内容は，各時間の目標や学習者の経験及び資質・能力によって異なるであろう。このため，各時間において具体的な関連性をもたせる指導計画が必要とされる。これが一人ひとりの子どもたち全員に，学習として理解・定着するに越したことはないが，常にそのような取り組みになるとは限らない。

実際の場面として，「①知識及び技能」のきっかけや働きかけにより課題を考える学習者もいれば，その割合は別にしても，友達と見合ったり・話し合ったり，資料を見るなどして，「②思考力・判断力・表現力等」から「①知識及び技能」へ繋げていく学習者もいると考えられるからである。それぞれに適した学習パターンが工夫されることが必要であり，このためには各時間に最少３つのパターンを想定して授業づくりをしていかなければならない。

基本的には，このとらえ方が新「学習指導要領」において求められている３つの力のとらえ方であり，また育成する力であると考えられる。この学習指導パターンが，50分という１時間の授業の中でスムーズに展開されれば問題はない。しかし，現実的にさまざまな学習者がいることも考えなければならないため，このイメージをより実態に近づけて表現したのが，図Ｄ を改良した図Ｅである。



図Ｅ

ここでも，図Ｄと同様に，３つの力は変わらない。図Ｅの歯車の大きさについては，一番大きなウエイトがある目標が大きな歯車となり，仮にそれを③とすれば，この③が回ることによって，①や②に力を伝えることができるということになる。歯車③のギアの数は多いため，①や②に力を伝え，ギアを１つ動かすためには，③はギアを２つ動かさなければならない。しかし，①のギアを１つ動かすと，②のギアを１つ動かすことになる。授業はもちろん一番大きなウエイトの目標を中心に計画・展開されるが，これらは互いに連動し合うため，学習者がどの歯車やギアに学習のきっかけをつかむのかは，想定通りではないこともある。

実際には学習者が兼ね備えている歯車やギアの大きさや数はさまざまであろうし，また課題内容や運動経験・学習場面などによって，図中の①・②・③は入れ替わることもあるであろう。よりよい授業づくりのために指導者が考え

ておかなければならない重要なことは，これら３つの力は互いに関係性をもち連動すること，それは学習者により一様ではないこと，３つの力を育成する授業づくりのイメージをもつことである。このことにより，授業はこれまでよりもより多くの学習者に受け入れられると予想される。

しかし，このような授業が展開すれば，授業は多様化し，柔軟化する可能性がある。学習者も指導者も慣れない授業であるため，授業前半の「課題把握」や「追及活動」では各自でできる思考（選択）・判断などがあるため受け入れられやすいものの，最後の「定着・発展」段階での「振り返り」ではまとめきれない生徒が出現することも考えられる。変化する場面はいろいろと想定されるが，体育授業は教育であり，３つの力の育成をする授業であることを念頭に置く必要がある。

おわりに

本研究においては，小規模校の特徴を生かした授業づくりを目的として，2021年度より全国の中学校において完全実施となる「中学校学習指導要領（保健体育編）」に即したバドミントン単元について検討を行ってきた。その結果，少人数の授業であることにより，「①知識及び技能」については個々に対応することができた。「主体的・対話的で深い学び」として，「②思考力・判断力・表現力等」の観点から，仲間と協力して取り組むなどコミュニケーションを深める授業づくりを実施することができた。また，全学年による合同体育などにより，「学びに向かう力・人間性等」についても育成することができたと考えられる。しかし，一方では，ワークシートの項目内容の作成やその回答の分析が十分ではなかったこともある。今後，ワークシートの内容検討を取り入れることが必要であると考える。
今後，本研究が小規模校におけるバドミントン授業の一つのモデルとして，よりよいバドミントン授業づくりに向けて参考となることを期待したい。

註１　従来，中学校・高等学校の保健体育の１時間分の学習指導案細案は，「導入」・「展開」・「整理（まとめ）」など，３段階で構成されることが多かった。これは各段階で取り組まれる「準備運動」・「主運動」・「整理運動」という運動の区分に連動して用いられている区分段階である。しかし，小学校では「みつける」・「たしかめる」・「ひろげる」・「まとめる」など，学習のながれを当てはめた４段階を採用している学校も多い。上川学校体育研究会では，「課題把握」・「解決の見通し」・「追求活動」・「定着発展」という４段階を採用している。

引用・参考文献

１）旭川市立嵐山小中学校，「併置・小規模・少人数の利点を活かす10の方策」，http://www.asahikawa-hkd.ed.jp/arashiyama-els/，平成30年度%E3%80%80学校要覧.pdf.,（2020.4.13現在）.

２）文部科学省，中学校学習指導要領（平成29年告示），https://www.mext.go.jp/content/1413522_002.pdf,（2020.4.13現在）.

３）文部科学省，中学校学習指導要領解説保健体育編（平成29年告示），Pp.305.ISBN978-4-8278-1560-3.

４）同上書３），p.1.

５）文部科学省，学校教育法施行規則第４１条：小学校の学級数は，十二学級以上十八学級以下を標準とする。ただし，地域の実態その他により特別の事情のあるときは，この限りでない。https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317990.htm.,（2020.4.13現在）.

６）文部科学省，「子供たち一人ひとりに個別最適化され，創造性を育む教育　ICT環境の実現に向けて～令和時代のスタンダードとしての１人１台端末環境～≪文部科学大臣メッセージ≫」，https://www.mext.go.jp/content/20191225-mxt_syoto01_000003278_03.pdf.,（2020.4.13現在）.